



- ・ 2021年11月21日（日）
- ・ 「スローライフ・フォーラム in 十津川」
- ・ 基調講演『「むら」に生きる～コロナと向き合いながら』
- ・ 講師中村桂子（JT生命誌研究館名誉館長、スローライフ学会副会長）

今日の話の題は“「むら」に生きる”です。普通だったら村に暮らすだと思いません。村に生きるってかなりの覚悟がいる、そんな風に私には思えます。こういう題が出てきたのもこの村の方たちが、スローライフ・ジャパンも少しお手伝いをしながらですが、これまで真剣に考えていらしたからだろうと思います。あまり深く考えずに村のこれからを、となると、村で暮らすぐらいになります。が“「むら」に生きる”ということになったところに意気込みを感じます。今日はコロナにプラス、異常気象を加えてこのようなめんどろな問題のあるなかで単に暮らすではなくて、これからどう生きようかということをお皆さんと真剣に考えたいと思います。

今日のプログラムに「6つの提言」がありますが、そのなかにそういう気持ちがとても込められている。私がこれに加えることはありません、けれども外から来た何も知らない人の話を聞いていただくとちょっと違う視点が入って、これからまた新しいことがお出来になる、役に立ってくれたらいいなと思っています。

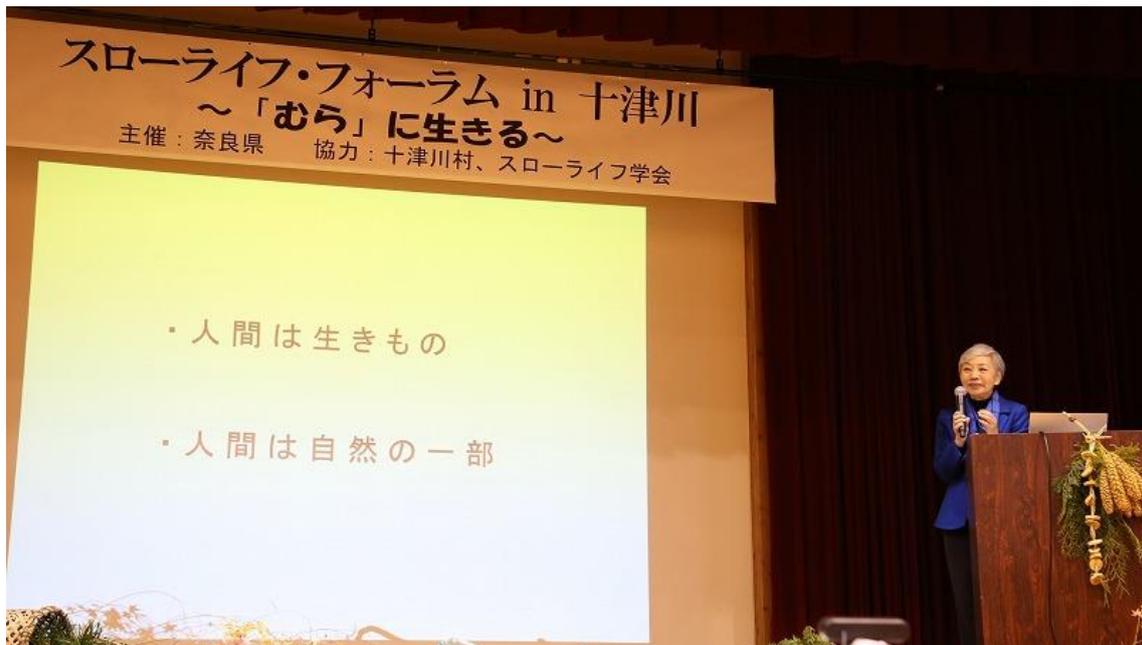


昨日は東京から新幹線に乗って京都から近鉄に乗って、それからバスに乗って来ました。何がしたいかと申しますと新幹線は速度 300 km 近くで走る、そして近鉄でもうちょっと遅くなって、バスで遅くなって、だんだんだんだんと速度が遅くなっていく。高層ビルが林立しているところから出てきましたが、着いたら木がいっぱい立っている森の中だった、あっという間にこういう体験をしたわけです。

どんどんゆっくり遅くなってきた、ここに着いた途端私はちょっと懐かしいって感じたのです。懐かしいという感覚はいろんなことを考えるときにとても大事なものです。懐かしいという気持ちがあると何かがしたくなる、そういう感覚だと思えます。初めてなのに懐かしいと思う、何で懐かしかったのかというの一つはその時間です。遅くなってきて段々ある意味不便になってきた、それはちょうど私の子どもの頃に戻ったような感じがした、そういう戻った「子どもの頃の懐かしさ」が一つです。

もう一つは、私は生きものの研究をしていますので人類、人間です。人間のスタートは 20 万年前にアフリカの森から始まりました。森がなかったら人間は生まれていない。そこからだんだん進化して 20 万年も経って、現代の生活をしているわけです。私たちの体はその間ほとんど変わっていない、私たちの体のなかにはおそらく森の中で暮らしていたその「人類の懐かしさ」みたいなものが入っているのだと思えます。個人的な懐かしさ、人類としての懐かしさ、この二つをここに来たときに感じました。

コロナと異常気象のなかで、世界中の人が何か変わらなければならないと考えています。しかし高層ビルが林立していてもものすごく早い時間が流れているところでは戸惑いしかない、この先、何があるのだろうという感じだと思えます。むしろこの村のように「不便」という感じがあり、それから「森」がある、おそらくこういう状況のなかからこそ新しいところへ向かって行けるのではないかと感じました。村がどう生きていくかというテーマで十津川村のことを考えるのがこのフォーラムでの大事なことですが、これはおそらくこれから人類がどう生きていくかという、大きなことにつながるのではないかと思います。



「人間は生きもの、人間は自然の一部」 私はこう考えています。ビルが林立してすごく早く動いているところの人々は生きものとして生きていない、おそらくこの村では生きものとして生きることができるだろう、それが未来に繋がるだろうと、そんなことを考えたいと思っています。

産業革命以降の人口の伸び、これを成長、成長といっているに追いかけている。何かとっても異常に私には思えます。これを支えているのが、おそらく同じように伸びているエネルギーです。これで異常気象が起きている、この先どうするのだろうかって考えます。

私が初めて研究の世界に入ってもう60年以上、最初に行った研究がバクテリアを培養して、それで遺伝子の研究をするということでした。試験管の中に栄養分を入れてほんの少しのバクテリアを夕方帰る時にちょっと入れ、37°のところに一晩置いておくと、ものすごく増えます。一兆個のレベルに。バクテリアは一晩でこれをやってしまうのです。こうなった時にどうなるかという、必ず定常状態に入る。そのまま伸びることは決してない、生きものは定常状態に沿わなかったら死にます。それを私はずっと体験しているので、この状態があったらこれは何とかして定常状態に持ってかないと、生きることは出来ないと思っているわけです。

産業革命以降のこういう状況が何で起きたかそれは近代産業、そこでエネルギーを沢山使って便利にして暮らしやすさを求めてきた。何も悪いことをしようと思ったわけじゃない、暮らしやすさを求めてやってきた、機械をどんどん使ってきたのですけども。ルイス・マンフォードがっています。「近代産業のカギとなる機械は、蒸気機関ではなく時計である」私これはとても適切な言葉だと



思います。機械は蒸気機関で始まって、自動車となって、それで産業世界は今みたいになったのだと普通はいわれるのですけれども、実は一番大事なのは時計だと、彼はっています。時計は時間の管理であり、便利さを求める象徴です。

「便利」とは、一つは、効率的に早くできること。二つ目は手が抜けること、手をかけないで済むように。三つ目は思い通りになることです。ご飯づくり一つ考えても、炊飯器は早く炊け手が抜けて思い通りに炊ける。とつてもありがたい、かまどで炊けといわれたら私にはそんなことできません。そういう意味では機械は便利で、ありがたいものです。

ただこれは生きものとは違うということは知っておかなければなりません。生きものは時間がいります。赤ちゃんが育つためには時間がいります。二番目の手が抜けることも、皆様の方がよくご存知だと思いますけど生きものは手を抜いたら、作物だって、お花だって、子どもはもちろん上手には育たない。だから手がかかる手が抜けない。三番目の思い通りになるも。自動車はアクセル踏んでブレーキ踏むで、それで思い通りになります。生きものはちっとも思い通りになりません。

でも思い通りにならないからこそ思いがけないことがあって、ある意味豊かなものを生み出しているわけです。その「便利」に対応する生きものを見ると時間がかかる手がかかる思い通りに行かない。そこに生きものらしさがあってこれが言葉でいえば「不便」かもしれない。でも私はこの不便さにむきあって、これを上手に使っていったらいいのではないかと思います。例えば子どもまで機械みたいに早く早くっていても無理で、作物に早く育てといても無理で、そういうところでその不便さにもものすごく意味を見つけてそれを上手に活かして、不便で困ったね、嫌だね、じゃなくて不便さを克服して不便さから新しいものを生むという努力を今やるのが、きっとクリエイティブなことを産むことに繋がると思います。

この十津川へ伺って二日間過ごしているうちに、もし私が十津川村の村民だったらこんなことをやってみたいということを思いました。東京だと、特にAIとかやっている私たちの仲間には、心も体もちょっと辛くなっている人たちが割合います。そういう人たちに来てもらって五日間時計を外す、時計無し of 生活をしてもらう。東京では出来ません、ここだったら時計無し of 生活ができる

思うのです。何を目途にするかということと太陽です。一つ私たちは自分の中に体内時計を持っています、それぞれの細胞のなかにも時計が入っていて、その時計がきちんと動いている時私たちはとっても気持ちがいいということが分かっています。私はスローライフのスローは「生きものの時間」だと思っているのですが、スローライフの会合でも現実には「あなた 10 時 10 分だからちゃんとここにきてね」と今日はいわれました。それをやるしかないわけです、現代社会では。

時計を外し五日間ぐらい何でも好きな時にご飯食べていいですよ、好きなときに遊びに行って集まってやりなさい、そしてその時にちょっとお茶出しておあげますよ、みたいなそういうことをやったらものすごく健康になるんじゃないかと思えます。最初はめちゃくちゃで迷惑かもしれませんが、変な時にご飯食べたいっていわれたりすると。おそらく続けているうちにリズムが生まれてくると思う、そういう形で暮らせたならその人はとっても健康になって幸せになって、もしかしたらずっとここに住みたいっていうかもしれないなって、これ私の妄想ですけども、そんな時計を外す生活が考えられるのではないかと思います。

時間のことを考えましたが、もう一つこの“「むら」に生きる”ってどういうことだろうといくつか考えてみました。先ほどの定常という話、この定常にならなければいけないということをいいますと、私たちだって実はそれを知っているわけです。私たち生まれて育ててそしてある程度まで育ち、そこでもう伸びはしない。そして残念ながら老いていってそして死ぬ、その生まれて育てて成長しいろいろなことをやって老いて死ぬという全体が「生きる」ということ。成長が生きるということではない、というのがあきらかなわけです。

昨日、「高森のいえ」を見せていただいたのですが、まさにあそこは生まれて、そして子どもたちが育てておとなになっていろんな生活をして、そして老いて死ぬという全体を考える場になっていると思いました。“「むら」に生きる”という言葉のなかには、生まれ、育ち、老い、死ぬという流れがあり、この流れをいかに上手にできるのかが「生きる」ということだと思っています。それを支援するシステムはこの村ならできると感じました。



私は東京に住んでいますので村を知りません。「村」という字を生まれて初めて辞書で引いてみました。『広辞苑』、こちらでは「地方公共団体の一つ」と。それはそうでしょうかと思いました。私の好きな辞書、三省堂の『新明解国語辞典』辞書が人格を持っているような辞書です。こちらでは「農業・漁業に従事している人家が何軒か集まって集落をなしている地域、周囲が山林、田畑、海などに囲まれていて夜になると寂しくなることが多い」とあります。夜になると寂しくなることが多い、ここがすごく気に入っています。もう一つは、「地域、血縁による結びつきの強い伝統的な共同体（生活様式）の象徴として用いられることがある」ある意味とても大事なことです。55の大字があり、それぞれの伝統がありそれを大事にしているけれども、一方でこれが今の若い人たちにはちょっと面倒、束縛感になっていることがあるかもしれない、こういうところを考えると村ってこういうことなのだということ、ここからいろんなことを考えられるなと思います。

新聞を読んでいましたら、ある追悼文にこんな言葉が書いてありました。「一人の子どもを育てるには、一つの村がいる」アフリカの諺だそうです。アメリカのコリン・パウエルさんという黒人ではじめて国務長官になった方、アメリカのとても重要な位置でお仕事された方が亡くなりました。政治はよくわかりませんが、この方で思いたすのはイラク戦争を大量破壊兵器が本当はないのに「ある」といって始めてしまった。国務長官ですからとても責任がある、コリン・パウエルさんは最後の最後まで「あれは間違っただ判断だ」といって非常に悩んでいたということを知って、私はとても誠実で素晴らしい方だと思っていました。

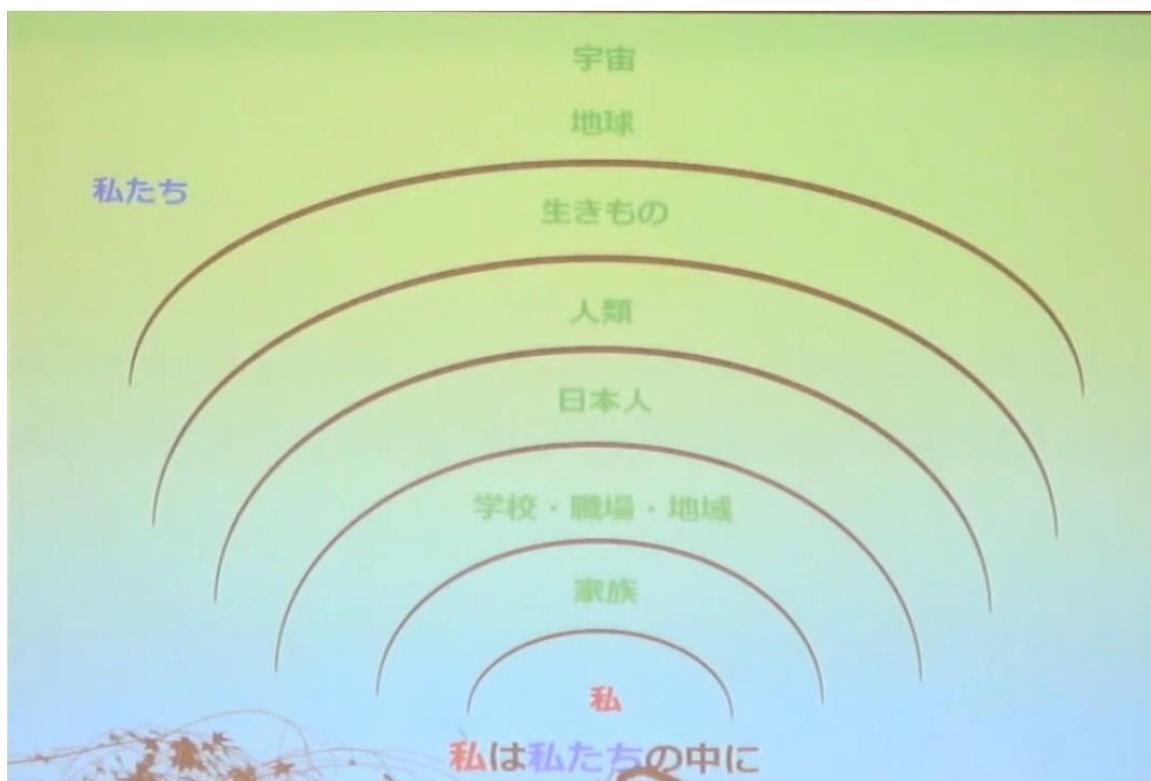
その方が亡くなったときにこの言葉がありました。アフリカ系の黒人で、黒人のなかで育つてとても貧しい子どもだったのだけれども、その黒人仲間の村、仲間たちがパウエルさんを育てた、アフリカにはそういう考え方がある、と書いてありました。これを読んだときに明らかにおもったのは、町や市がではこういうふうにはなりません。「一人の子どもを育てるには、一つの町がいる」といってしまったらそんなことはできないよと思ってしまいますが「一つの村がいる」といったら、子どもは育つだろうなと思います。最近では人材育成といいますが、ここでいう「育つ」は、人材育成ではなくて人間を育てるということになる、それには村というのはそういう場所だと、十津川村はそういう状態があるような気がします。



つながりを切っていったのが効率、もしかしたら不便さというなかにはこのつながりを大事にするということが入っているのではないのでしょうか。コロナでも異常気象でもいろんな災害にあうたびにつながりの大切さを多くの人を感じています。よく思い出すのは東日本大震災のときに、「絆」という言葉が使われました。みなさんの気持ちはよくわかるのですが、絆というのは辞書で引くと家畜をつないでおくものなのです。つながりはあるのだけれどもある種の束縛感があります。

最近の本屋さんでは「利他」という言葉があふれ、利他について書かれた本がいろいろ出されています。これも大事ですが、この利他というためには「利己」がある、本当は私が大事なのだけれどもやっぱり他も、というのが利他であると思います。実は「私」というのは利己とかではなくて、まず「私たち」というのがあって、私たちのなかに私がいるのではないかと思います。

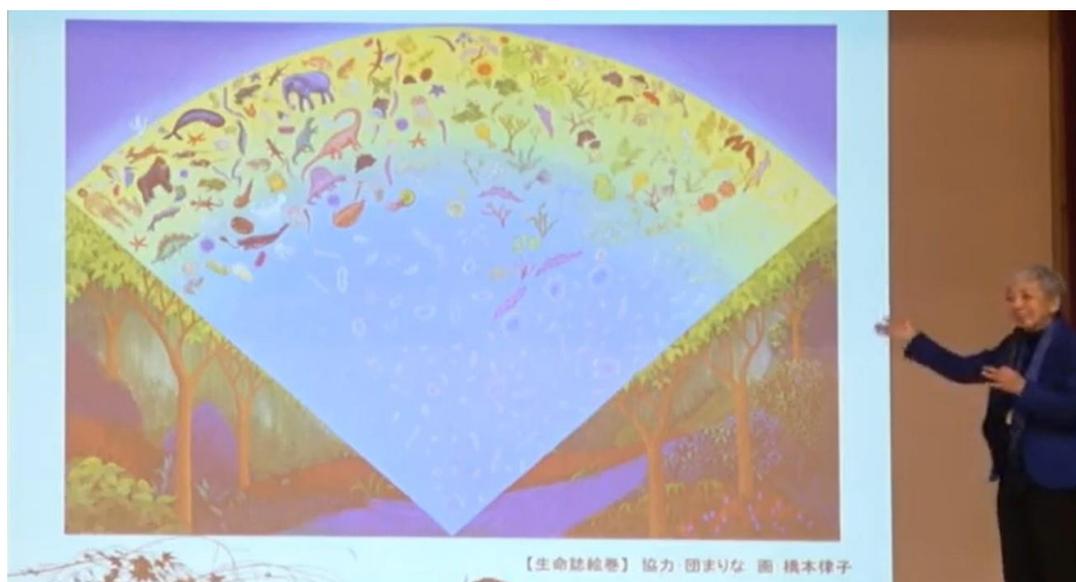
私は私たちのなかにいる、家族があり、学校や職場があり、日本人という仲間があり、人類という仲間があり、私たち生きものがあります。家族とか、学校とかというのはある種のしがらみがありちょっと辛いものもあるので、私はそこをつき抜けて「私たち生きもの」という感覚をまず持つことがとても大事だと思っています。最初に「私たち生きもの」という感覚を身につけて、そこから私たち人類とか、私たち家族とか、なかへと入っていく形で行動を取ると、とてもおおらかになって新しい「生きる」ができるのではないかと思います。



ここに生命誌の絵があります。ここから三つのことが読み取れます。扇の一番上にいろいろな生きものが描いてあります。バクテリアがいて、キノコがあり、ヒマワリがあつたり、イルカもいたり、本当に多様です。生きものというのはどんどん多様になる、生きものは続いていきます。私たちが今、コロナや異常気象で考えているのは、続いていけないのではないかとということ、どうやって続いていくのだろう、上手に続いていくにはどうしたらよいのだろうということですが、生きものはどんどん続いてきました。続いてきた原因は何かといたら多様化したことです。今、何千万種と生きものがいて、あらゆるところに住んでいます。この絵からわかることは、私たち生きものは多様であるのが大事ということ、これが一番。

多様でいろいろなものがいてもみんなバラバラではおもしろくない、じつは生物学は生きものはすべて細胞でできていることを証明して、こんなに多様だけれども、もとは同じ細胞から生まれてきたということを明らかにしました。これが扇の要のところ。これが 38 億年前、その 38 億年前の一つの細胞から今の多様がある、多様性をみとめていろんな生き方が大事だと思うのですが、実は仲間なのだというのが二番目。同じ細胞から生まれているのですから。多様なだけれども仲間なんだという感覚が「私たち生きもの」という感覚です。

それからみなさんが学校で生物学を習ったときに下等生物とか高等生物とかいう言葉があつたと思います。今は生物学のなかにそういう言葉はありません。なぜなら、みんな 38 億年の歴史をもつ生きものなのです。あらゆる生きもの、アリも 38 億年かけてここにいる、お腹にいるバクテリアも 38 億年かけている、全部が 38 億年の歴史を持っている。それはすごく重いもので、それぞれがそれぞれに、それぞれらしく生きているだけで、38 億年の歴史は全く同じなのです。上下はない。



【生命誌絵巻】協力・団まりな 画・橋本律子

これは「進化」と申します。進化というのはエボリューションといって展開です。一方「進歩」プログレスというのは一本線です。高層ビルを林立させて忙しくやっているところは進歩を求めてきました、一本線でやってきた、だから辛いのです。展開していけばいいのです。なんでもいいよといって展開して、根っこは同じだよといってみんな同じ上下なしということ、それが三つ目です。

現代社会では、多様性を認めながらもこの扇の上に人間が、自分たちがいると思っている。「上から目線」で「生物多様性大事にしてやろうね」とおっしゃっていますが、実は人間は扇のなか、つまり他の生きものと同じところにいるのです。私はこれを「中から目線」といいます、中から目線での「私たち生きもの」感を共有していただきたいのです。「生きもの」の上は、地球であり宇宙があります。宇宙とつながり地球とつながり私たち生きもの、というところからだんだん私たち日本人だよ、家族だよとくると、とても広がった気持ちになるのではないのでしょうか。私はこの十津川であれば「私たち生きもの」という考えは、必ず持てるはずだと思います。

ここで人数のことをちょっと考えたいと思います。実は人間というのは森で生まれたのですがちょっと弱かったのです。なぜ二足歩行にしたかといいますと、食べ物を取りにいったときに家族にそれを持って行かなければならいので二足歩行したというのが最近の説で、私はそれが大好きです。弱かったから新しいことをやった、弱いといろいろな新しいことをやらないとならないので、考えていくと思います。人間の特徴は共食することです。みんなと一緒に食べる、それを持っていくために歩いたのです。子育ても人間の場合は一緒に育てます。親子だけではなくて、おじいさん、おばあさんも一緒になって育てるとというのが人間の特徴です。その家族はだいたい10人くらいです。



狩猟採集など始めて、狩りが必要となるとだいたい30人くらいの協力が必要になります。そして私たちの脳でいつも仲間と考えられる大きさは150人です。脳の大きさと付き合える人数が分かっている、人間の脳の大きさと付き合えるのは150人です。

10人でスポーツをやる、野球もサッカーもこれくらいです、以心伝心と一緒にで

きる仲間は10人くらい。クラスくらいになって、少し決めごとを作って一緒にやっていくのがだいたい30人くらい。それからお互いよく分かり合いながら、しかし広くやっていく地域社会になってきたのが150人。人間のつながりの数はこんな感じです。今、ネットでどンドンつながることはできて、それをやってはいけないとは思いませんが、この生き物としての人数はこんなベースがあるということを感じながら、つながりをしっかり作っていくのもとても大事なことです。

私たち人間だけができることは、「想像」することです。他の生きものにはできず私たちだけできるのは想像、他の生きものには想像力はありません。よその人のこと、過去のこと、未来のこと、いろいろなことを考えられる、想像できる。それから「分かち合う心」。強い人が、弱い人に分けてあげる。他の動物の世界だと強いのがどんどん取ってしまうのですけれど、強い人こそ相手に分け合えるというのが人間のもっている分かち合う心です。世代を超えての協力も人間だけが持っている能力です。おじいさん、おばあさんと孫の関係は人間特有のすばらしい関係なのです。先ほどのつながりのなかにこれらのことを入れていくと“「むら」に生きる”というのがとっても具体的に進んでいくと思います。

現代の都会は便利で、機械的で効率的で簡便でグローバル。スローは「生きもの」の時間です。歴史性がある、地域性がある、文化ということ。文明より文化を基本にする。文化というのはカルチャー、カルチャーって耕作ですから土に根差していて、しかも教養につながっていく、こういう形が“「むら」に生きる”ということになっていくのではないかと思います。「時間」と「つながり」、十津川村というのはこういうことを考えるのに、とっても大きな可能性を抱えていると感じました。

いつも自分のなかで考えていることがもし十津川村のどこかで活かしていただけなら嬉しい、ありがたいと思っています。役に立てる話ができるかどうかとずっと悩んでいましたし、今も同じきもちですが、どこか拾っていただけたらとても嬉しく思います。

どうもありがとうございました。